

「石川県治改革ノ件」

原 禎 嗣

以下に紹介するのは、明治一五年から一六年にかけて、石川県において行われた「官吏の入れ換え」めぐる、明治政府の意思決定に関する史料である。

明治期の石川県政に関する研究は、他の時代に比して大きく立ち後れており、今日においても、昭和初期に編纂された「石川県史 第四編」⁽¹⁾及び「稿本金沢市史 政治編第一」⁽²⁾の両書に負うところが大きい。両書は優れて先駆的であり、初期石川県政史を知る上で必須の文献といえるが、編纂当時の史料的制約もあり、新たな史料の発見により、補訂されるべき点も見受けられる。

本稿で紹介する史料は、明治初期、中央集権的国家体制下における「中央」と「地方」の関係を示す好例であり、右両書で言及されていない石川県政史の一齣を伝える貴重な史料である⁽³⁾と考える。

まず、本件官吏入れ換えの遠因となった、明治初期石川県下の士族の動向を概観しておく。⁽⁴⁾

石川県では、明治七年一二月に、「忠告社」⁽⁵⁾と称する士族民権結社が成立した。忠告社は、県下政治結社の嚆矢であり、結成直後から、資金、人員共に充実し、県政界中主要な位置を占めた。また、八年二月には愛国社結成に参加するなど、活発な活動を展開した。しかし、結成時の中心メンバーであった島田一郎らが、幹部の漸進主義を批判して組織を分断し、更に、島田らが明治十一年、参議大久保利通を暗殺するにおよんで、衰退の一途を辿ることとなった。

続いて明治一二年初頭、「精義社」⁽⁶⁾と称する結社が成立した。同社は、一三年三月、愛国社大阪大会に社員を派遣するなど、⁽⁷⁾民権結社として活躍したが、やはり内紛から弱体化していった。その後精義社は、旧藩主前田家に対し、維新以来衰退を極めて

いた金沢の復興と士族授産のために、鉄道建設を働きかけた。

明治一三年四月には、新たに「⁽⁸⁾ 盈進社」が成立した。社員には、石川県、金沢区の吏員も多く、必然的に県政界に大きな影響力をもった。しかし、この団体は、当初、政治的活動を前面に出すことはなく、専ら「⁽⁹⁾ 国益ヲ起シ民福ヲ増ス」ことを主眼としていた。そして、旧藩主前田家に資金の提供を求め、開墾、炭坑開発を行い、維新後落剝を余儀なくされていた士族への授産を試みようとした。

前田家は、これらの申し出に対し、明治一三年中、金沢に「⁽¹⁰⁾ 起業会」なる組織を結成し、士族授産事業について旧加賀藩士族の意見を聴し、翌明治一四年、鉄道会社を設立することに決した。⁽¹¹⁾ この決定に対し、盈進社員は猛然と反発し、結果として、県下士族を精義社を中心とする鉄道派と盈進社を中心とする開墾派とに二分することとなった。

当時の県令千坂高雅は、⁽¹²⁾ 明治一二年三月に着任すると、地元の士族と融和姿勢を取り、同年の第一回県会以来、比較的順調に県政運営に当たっていた。⁽¹³⁾ しかし、明治一五年三月開会の第四回県会では、自由党系議員との対立が表面化した。予算問題に端を発した対立は、やがて県会による県令解任決議案提出に

進み、対する県令は、内務省より県会解散命令を取り付けてこれに対抗した。⁽¹⁴⁾

この第四回県会の開会を前に、千坂の腹心である警部小倉信近が、夜半、市内で一団の暴漢に襲撃され、重傷を負うという事件が発生した。⁽¹⁵⁾ 翌年二月、既に県外にあった容疑者四名が逮捕されるが、容疑者はいずれも盈進社社員であった。供述によると、事件は、千坂がしきりと自己の縁故者を登用し、石川県人を排斥することに憤った県官員、警吏らと呼応して、暴力に訴えたものという。⁽¹⁷⁾

県庁、警察内部では石川県人との疎隔、県会では自由党との軋轢という二重の対立に、千坂は、内務省に対し、官吏の大幅入れ替えを中心とする「⁽¹⁶⁾ 県治改革案」を提起するに至ったのである。

千坂の提案は、同人発、内務卿山田顕義宛の書簡として、「⁽¹⁷⁾ 田顕義文書」に収録公表された。以下にその全文を掲げる。

本県下士族各々朋党ヲ結ヒ陰險ノ陋習アルハ決シテ今日ニ始ルニ非ス、藩政ノ頃ヨリ馴致セシ次第ニシテ追々御承知ノ通ニ候、今聊カ不穩ノ姿ニ有之候ハ其起因カノ鉄道企業ノ為メ舊藩主前田入県ヨリ次第ニ紛糾ヲ増長致シ、何トカ

処置セザルヲ得ザル場合ニ立到リ、若シ此仮差置候テハ他日ノ大害ト可相成、抑々高雅赴任ノ際ハ、島田一郎暴挙ノ後ニテ、県庁於テモ警備探偵等尤モ厳密ヲ極メ、人々安堵ノ思ヒナク、随テ県治ノ順序整ハス、管民ノ不幸不可言次第ニ有之候ニ付、首トシテ警備ヲ解キ探偵ヲ廃シ言路ヲ開キ辭屈ヲ伸ベシメ、毎事寛容公正ヲ旨トシ漸次改良ノ目的ヲ以テ措置致シ来リ候ヘ共、赴任否劇病大ニ流行シ、引続キ越前ノ改租再調、福井県ノ分置、県会ノ困難、各川非常ノ水害、其他庶務ハ渋滞ヲ極メ、士民ハ苦情ニ募リ、数多ノ艱難目前ニ迫リ始終寧日ハ無之、今日稍々緒ニ就クニ及ヒ、唯々士族ノ心思ヲ正フシ方向ヲ定メ将来生計ノ途ヲ授クルノ一点ニ至ツテハ、前述ノ通り其土俗風習一種ノ弊アリテ猜忌ノ念尤甚シク、殊ニ瑣細ノ浮説流言ヲ放テ相傷ヒ相害スルノ陰險ハ其習弊深ク骨髓ニ染ミ容易ニ洗淨ノ場合ニ運兼候得共、高雅赴任ノ初ニ比スレハ幾分カ改良ニ趣キ候処、前田氏入県ニテ死灰再焰最早断行一洗ノ所分ニ及ザルヲ得ザルノ域ニ迫リ候、高雅此迄取扱来リ候手覚ヲ以テ篤ト処分ノ方案ヲ考フルニ、決シテ尋常政略ノ能ク治スル所ニ非ラス、到底二条断行ノ外ナクシテ機モ亦タ失フ可ラスト見込ミ左ニ条列仕候、

第一条 憲兵及巡查若干名ヲ派遣相成リ金沢区内ノ警備ヲ嚴ニシ、鉄道布設許可ノ指令ヲ下シ、私学校ノ廃止ヲ命シ、而シテ属官警部等党派ニ頼リ庁中事務ノ整理ニ害アル者ハ一切之ヲ免黜シテ其党派ニ關係無キ者又ハ他邦人ヲ以テ組織致シ、郡区吏迄モ改撰シ、且ツ嚴重ノ取調ヲ尽シ必ス小倉警部ヲ暗撃セシ犯罪人ヲ得其情ヲ糺シ其罪ヲ明カニシ、痛ク陰險ノ風ヲ懲シ因襲ノ弊ヲ一洗スベシ、尤モ此ノ場合ニ於テハ従前ノ行キ懸リモ有之旁、高雅儀ハ断然転免相成、御一新以來国家ニ勲勞有之藩々ヨリ出身致候仁又ハ官省ニテ名望有之仁御撰拔有之県令ニ被命、警部長モ其信任スル仁御採用有之、不疑御任用相成候ハ、可然存候、

第二条 一時県令ハ其仮被差置、小倉警部ニ暗撃ヲ加ヘタル犯罪人取調ヲ名トシ巡查二百名警部共ニ派遣相成リ警備ヲ嚴ニシ、一新ノ目的ヲ以テ庁中ヲ始メ転免黜陟ヲ行ヒ、就中用立候者ハ属官等外吏ヲ問ハズ大ニ官省府懸エ採用相成リ、而シテ前田家ニ於テ曾テ目論見有之鉄道ノ許可ヲ定メ、私学校設立ノ方向ヲ糺シ真ニ教育ノ主意ヲ達セシメ度候、併シ此ノ第二段ノ方案ヲ成スニ当テハ高雅ノ後任ニ充ツヘキ資格アル人物ヲ御撰拔ノ上書記官ニ被命度候、尤モ一大段落鎮靜致シ候ヘハ、其機ヲ外サス直チニ高雅ハ免黜

相成り、便チ其書記官ヲ以テ後任ニ被命度候、畢竟此迄士族取扱ニ付テハ前述ノ通寛嚴ノ間ニ於テ自ラ行キ懸リモ有之、俄カニ面目ヲ改メ候上者決シテ永ク其地ニ居ル可カラサル次第第二有之候、

右両條ノ儀ハ特別ヲ以テ官員俸給ハ増額有之、派出ノ警部巡查ハ本県ノ警部巡查ニ御引直シ相成り、警部長モ亦タ右ノ内ニテ御撰任有之度候、他日弊害ノ大ナル日ニ至リ処分センヨリ寧ロ今日断然決行シテ将来ノ安寧ヲ保ツ方可然ト奉存候、或ハ其所分重大ニ過クルノ説モ可有之哉ニ候ヘ共、數百年來ノ宿弊ニシテ其病深ク膏肓ニ入り、今ニ及ンテ治セズンハ病愈々長シテ終ニ医スヘカラズ、實ニ今日コソ失フ可カラサル時機ト相考候、

之ヲ要スルニ、前条所分ノ義ハ、一二政府ノ信任ヲ得、管下人民モ亦タ其信任ヲ明カニ知り、然後能ク成ル所ニシテ又如此キ難事ヲ処スルニ当テハ、百為千断中失フヘカラザル機モ有之候ニ付キ、臨機專決ノ道ハ御許シ有之度、自然前吟後顧シ或ハ撃肘纏足セラレ活動スヘキノ余地無之テハ、免角失敗ノ基ニシテ到底奏功ノ見込無之候、苟モ一点ノ疑念アル間隙之レニ生シ、誹謗之レニ乗シ、世評喋々禍既ニ成リ、之ニ処スルノ術窮リ、之レニ応スルノ情露ハレ、茲

ニ始メテ県令ヲ改置セラル、如キハ、已ニ業ニ遅クシテ却ツテ本県ノ病勢ヲ激シテ之ヲ養成スルニ止リ、終ニ不可言ノ困難ニ可到ハ今更不待言、故ニ信任疑ハズ資格高キ人物ニ任セラレ、小過ヲ責メズ寛宥ノ御取扱有之候様希望仕候、断行ノ末ハ必ス不平ヲ増シ意外ノ世評ヲ來スヘキハ無論ニ付キ、兼テ内閣御一統ノ信任ヲ受クルニ非レバ決シテ手下ス能ハズ、具々モ御信任ノ仁御撰拔相成度奉存候、右ノ条々厚ク御商量相成リ御決行ノ程不堪至願候、頓首再拜、明治十五年三月三十一日

内務卿山田顯義殿⁽¹⁸⁾

石川県令千阪高雅⁽¹⁹⁾

右の書簡において千坂は、県政の問題点として同地の士族に「各々朋党ヲ結ヒ陰險ノ陋習アル」ことを挙げ、「瑣細ノ浮説流言ヲ放テ相傷ヒ相害スル」ことが、「士族ノ心思ヲ正フシ方向ヲ定メ将来生計ノ途ヲ授クル」という同人の対士族政策の障害になつてゐると述べてゐる。そして、同人の着任以来、若干の改善は見られたものの、旧藩主前田家氏の入県により、士族間の対立が再燃した県下の状態を「決シテ尋常政略ノ能ク治スル所

ニ非ラス」と断定した。ここで千坂が問題視しているのは、前述の士族結社及び「起業会」の活動であろう。これらを前提として千坂は、二ヶ条の改革提案を行ったのである。

提案の第一においては、「憲兵及巡查若干名」の派遣を得て金沢市中の治安を維持しつつ、士族結社の活動を抑止し、反県令派士族を県庁から放逐すること、更に、県令自身と警部長を入れ換えることを並べている。第二においては、二〇〇名の警部巡查を派遣し、小倉襲撃犯の捕縛に勉めるとともに、やはり反県令派士族を県庁から放逐し、事情が安定した後自身が転出することを掲げている。

千坂の提言を受けた内務卿山田顕義は、提案内容の実現を計り、政府もこれに同意した。⁽¹⁹⁾ 政府の決定を受け、千坂は、まず小倉警部長を更迭し、⁽²⁰⁾ 続いて同年五月、警視庁巡查一五〇名を率いて金沢入りし、翌年一月、自らの提案どおり転出した。⁽²²⁾ 千坂の後任として赴任した岩村高俊は、⁽²³⁾ 県政の安定を見た後、警視庁巡查を帰郷させた。⁽²⁴⁾

では、千坂の書簡に見られる官吏、巡查の入れ換えについて、どの程度まで行われたのであろうか。この問題に関しては、前述の「石川県史」、「稿本金沢市史」にはほとんど言及されていない。⁽²⁵⁾ そこで、以下に、明治一五年四月以降の石川県官吏の

転免を表にして示す。

表註(一)

典拠は「石川県史料」所収「官員履歴」巻之一―十二である。該史料凡例によると、「官員履歴」巻之一―三は「明治十七年現任」官、巻之四以降は、明治九年から一六年の「転免官」となっている。転免官の部に記述されながら、転免先、及び時期が明確でない場合があるが、表では「転免者数」に算入した。また、現任の部で転免が明らかなものも転免者として数えた。

(2) 表は、上段に「明治一七年現任官」数を、石川県への着任時年別に示した。中段は、明治一五年四月以降の転免者数を、転免年別に示した。下段は、参考のため明治九年以降、一五年三月までの転免者数を年別に示したものである。括弧内の数値は石川県属の数である。

在職者数	着任時期		人数
	15年3月以前	83	(70)
	15年4月以降	15	(1)
	16年	25	(4)
	17年	8	(2)
	計	131	(77)
転免者数	転免時期		人数
	15年4月以降	41	(13)
	16年	108	(54)
	17年	10	(1)
	時期不明	4	(0)
	計	163	(68)
参考数	参考		
	9年	63	(28)
	10年	32	(16)
	11年	19	(16)
	12年	32	(24)
	13年	40	(22)
	14年	28	(18)
	15年(3月以前)	10	(5)
	計	224	(129)

まず、総数であるが、明治一七年現在で在職するもの一三一名に對し、一五年四月以降転免するものは一六三名となっている。特に明治一六年は、一〇八名が移動しているが、これは富山県が分置されたためで、七〇名が富山県に転じた。次に、在職者中、一五年四月以降採用されたものは、四八名であるが、石川県實属はわずかに七名にすぎない。一五年三月以前に着任した在職者八三名中七〇名が石川県實属である点と比較すると、この差は大きいといわざるを得ない。表には記載しなかったが、採用者中もつと多いのは鹿兒島県實属であり一七名を数える。一方この時期、他に転じたもの一五九名中、石川県實属は六八名である。

以上、千坂が提言し、太政官が採用した「石川県治改革」により、石川県出身官吏が多数放出され、これに代わり「維新に功勞のあつた」藩出身者として、主に鹿兒島県實属が採用されたものと言えよう。

さて、前述の千坂の提案に呼応し政府が採った対応を伝えるのが、本件史料である。全体は、国立公文書館蔵「自明治十五年至同十六年公文別録内務省一」に、連続して綴じられた三件の史料であり、巻頭の目次には、

石川県県治改革ノ件

同県処分ニ付官吏交換ノ為メ要スル旅費支出方ノ件

同県特別警察費支出ノ件

とされている。内題は付されていないが、便宜上、右目次の記載を題目として付すこととする。以下に各文書の内容を解説する。

(一) 石川県県治改革ノ件

本文書には、内務卿山田顕義上申と同別紙、該上申に関する上奏書、太政官回議書が含まれる。

太政官に對し、本件官吏入換え案を提起したのが、この内務卿山田顕義による上申書である。内容は、前掲の千坂高雅書簡の内容を踏襲したもので、そこにうたわれた「改革案」もほぼそのまま見ることが出来る。山田は、千坂の書簡を受け、検討の結果、千坂の提案のうち、第一案については「其事稍々過重ニ渉ル」との評価を下し、第二案を実行に移すよう、主張したものである。

また山田は、千坂書簡にはみられない、執行時の予算についても言及しており、別紙において、詳細な実施計画が述べられ

ている。

別紙に見える実施計画は全九項目で、その要点は「警部長の交代」「警視庁巡查五〇名出張」「巡查一五〇名増員」「石川県在職の警部巡查の他府県への転任」「地方党派に関係ある官吏の官、省、他府県への転任」と、これらに伴う予算措置である。

本件上申、及び別紙は、明治一五年四月一二日付で提出され、同月一七日、太政官の会議に供され、「上申之通」と決した。

(二) 同県処分ニ付官吏交換ノ為メ要スル旅費支出方ノ件

内務卿山田顕義第二上申およびその要因となった石川県令千坂高雅伺、該上申に係る太政官会議議案書が含まれる。⁽²⁶⁾

内務省は、(一)「石川県治改革ノ件」裁可の後、官吏増員に要する費用として月額三〇〇円の増額を、明治一五年四月から同年度前半に限って許容する方針を固めた。しかし千坂県令は、官吏交換に伴う旅費の支弁が困難であるとして、四月二日、内務卿、大蔵卿宛に、追加支出を求める伺を提起した。

千坂の伺を受けた山田内務卿は、五月一日付をもって太政官に上申書を提出し、太政官においては、第一局での検討を経、同年六月三日、「定額金」から支弁できない分のみ、金額を申し

出るよう指令した。

(三) 同県特別警察費支出ノ件

これは、太政官において、史料(一)によって認可された石川県への警部、巡查派遣に伴う予算措置を決した際のものである。

四月二日、石川県令千坂高雅は、内務卿山田顕義にあて、「警察費特別増加金額予算」を提出し、年額三五二〇〇円を請求し、山田は、五月二日、千坂の請求とおりの金額を太政官に要求した。また、大蔵卿松方正義は、同月一〇日、石川県請求の金額を、明治一四、一五年度に分け、一四年度分として五八六七円を通常会計から支出する旨の上申書を太政官に提出した。⁽²⁷⁾この際大蔵省では、本件支出は通常警察費とは異なるため、「別途勘定」させるよう提言した。太政官では五月一日、会議を開き、本件五八六七円の支出を認め、大蔵省の提言どおり、別会計とすることを指示した。

上述の、巡查派遣は、この予算措置決定を受けて、千坂が行ったものと考えられるが、巡查派遣そのものに関する史料は発見できなかった。

- (1) 石川県編「石川県史 第四編」(昭和六年三月・昭和四九年九月覆刻)。明治初期の石川県政に関しては、同書にみられる記述が、管見の限り最も広範でありかつ詳細である。
- (2) 金沢市編「稿本金沢市史 政治編第一」(明治八年六月・昭和四八年七月覆刻)。同書は、前掲「石川県史 第四編」に負うと思われる点が多々あるが、やはり貴重な文献である。
- (3) 以下、本稿に引用する史料中、異体字、合字、変体仮名等は現在使用されている文字に改めた。
- (4) 以下の概説部分では、基本的に前掲「石川県史 第四編」の記述に従う。なお、同書から参照については、煩瑣となるため各士族結社毎に一括して示す。
- (5) 「忠告社」については、前掲「石川県史 第四編」二四一―八二頁、及び森山誠一「自由民権運動」(石川県社会運動史刊行会編「石川県社会運動史」(平成元年一月)所収)四一頁を参照した。なお、森山氏は、「加越能自由民権運動史料(四)―加賀・忠告社・関係資料」(「金沢経済大学論集」第二五巻第三号・三一頁以下・平成四年三月)において、同社に関する貴重な史料を多数紹介されている。
- (6) 「精義社」については、前掲「石川県史 第四編」二八二―九二頁、及び前掲森山「自由民権運動」五一頁を参照した。該森山論文には、「石川県史」に記述のない、精義社の前身とおぼしき「耕腸社」の存在が指摘されている。
- (7) 前掲「石川県史 第四編」二八九頁。前掲森山「自由民権運動」五四頁。
- (8) 「自由党史(上)」(岩波文庫版・二七一頁・昭和三年三月)には、明治一三年の愛国社大会参加者として、石川県から五人の氏名を掲げているが、前掲「石川県史 第四編」二八九頁では、そのうち二名を、精義社の代表としている。
- (9) 「盈進社」については、前掲「石川県史 第四編」二九二―九八頁を参照した。なお、同社は、明治一五年一月、石川県に対して「私立変則中学校」の設立認可を申請したが、社中の内訌から実現には至らなかった(前掲「稿本金沢市史政治編 第一」二七九―七八頁)。後掲千坂高雅雅書簡に見える「私学校」とは、この私立変則中学校をさすものと思われる。
- (10) 「起業会」の組織、活動については、前掲「石川県史 第四編」二九八―三〇二頁を参照した。
- (11) 鉄道敷設計画は、精義社の働きかけに旧藩主前田家が応じる形で具体化し、明治一四年、前田家当主利嗣が、北陸地方各地の旧藩主、東西本願寺門主らとの協同出資による「東北鉄道株式会社」設立を計画した。そして利嗣は、同年、金沢に入り株式募集に着手した。「東北鉄道株式会社」は、しかし、明治一七年に至り、旧藩主層が出資を取りやめた結果、株式募集の目処が立たなくなり、会社設立断念という結果に終わった(前掲「石川県史政治編四二九五―三〇一、三一〇―一頁、前掲「稿本金沢市史政治編第一」二四九―五一、二七五―七七頁、屋敷道明「東北鉄道と北陸線」(「実録石川県史」編集委員会編「実録石川県史」・平成三年一月)・六二―三頁)。
- (12) 千坂高雅は山形県士族。明治八年内務省七等出仕に補せられ、翌明治九年内務権小丞、後、権少書記官、少書記官、少警視など

を歴任し、明治十二年三月、石川県令となった(日本史籍協会編「百官履歴」二・百官七・一一七―八頁・昭和二年一〇月)。

- (13) 前掲「石川県史 第四編」・二八五―八八頁。同書によると、県下土族の千坂に対する評価は、「精義社の集団たる州崎廉一味も賞辞を呈し、忠告社の老志士も亦信服せり」(同書二八六頁)と、きわめて高いものであったことが知られる。

- (14) 千坂と石川県会との対立は、議員による県令侮辱事件へと発展した。本件に関しては、別稿を編み、詳述する予定である。

- (15) 小倉信近は山形県土族。明治五年海軍少尉に任官。明治九年、愛知県三等警部に転じ、明治十三年、石川県五等警部となる。以後、同県典獄を兼任し、十五年三月一日警部長に進み、四月二五日免官となった(「石川県史料」所収「官員履歴」巻之十一)。なお小倉は、後年衆議院議員、群馬県知事を勤めたが、明治三六年、教科書疑獄事件で取脂容疑で有罪となった(我妻榮編「日本政治裁判史録 明治・後」・三五―頁・昭和四四年二月、「群馬県人名大事典」・一二―三頁・昭和五七年一月)。

- (16) 金沢地方検察庁蔵「裁判書」。上記史料によると、明治一五年二月六日午後八時ころ、石川県警部小倉信近が何者かに暴行を受け負傷するという事件が発生した。翌明治一六年に至り、盈進社員飯田秀魁、利倉盛行、斎藤知一、堀俊明の四名が逮捕され、金沢軽罪裁判所の審理の結果、同年五月五日、殴打創傷の罪で飯田、堀、斎藤の三人に重禁錮六月、利倉は同幫助罪で重禁錮五月一日の判決が下った。

なお、事件発生日について前掲「石川県史 第四編」・三一六頁では「明治一五年二月中旬」、前掲「稿本金沢市史 政治編第一」・二九〇頁では「明治一五年三月」としている。また、両書とも、事件当時の小倉の職位を「警部長」としているが、「警部」

の誤りである。

- (17) 前掲金沢地方検察庁蔵「裁判書」。

- (18) 日本大学「山田伯爵家文書 五」・二―四頁・平成四年七月。同書目次には、県下土族各々党ヲ結び陰險ノ弊習ニ対スル措置策ニ付具陳スル件」とあるが、書簡そのものには内題はない。なお、千坂は、本書簡提出に先立ち、明治一五年三月一三日に金沢を発し、同月一九日東京に到着した(以上、国立公文書館蔵公文録)所収「官吏雑件 明治一五年三月」。

- (19) 「石川県治改革ノ件」。本稿一八七頁以下参照。

- (20) 前掲註(15) 参照。

- 後任の警部長となったのは鹿兒島県土族園田安賢で、内務権少書記官兼任のまま一五年四月二〇日着任した。しかし園田は、同年六月二四日、石川県大書記官に転じ、九月二六日、二等警視兼内務少書記官となり転出した。園田に代わり警部長には、鹿兒島県土族渡辺佳介が就任した。渡辺は、陸軍中尉、熊本県五等警部などを経て明治一五年一月、石川県四等警部となり六月二二日、警部長に昇った(以上、前掲「石川県史料」所収「官員履歴」巻之一、巻之十二)。なお、園田、渡辺の警部長就任日は、ともに前任者の転出日より数日早くなっている。これは、「発令日」が記録されたためと思うが、確証は得られなかった。

- (21) 千坂は五月一七日東京を出発し、同月二二日、任地に帰着した(以上、「公文録」所収「官吏雑件 明治一五年五月」)。千坂による警視庁巡査招致については、かなり早い段階で金沢に報知されていた。当時石川県下で発行されていた雑誌「自由新誌」は以下のように伝えている。

○千坂県令百五十名ノ巡査ヲ率テ帰任セントス
我カ石川県令ナル千坂高雅君ハ今度東京巡査ノ内百五十名ヲ

選抜シテ本県巡査ト為シ不日之ヲ引率シテ帰任セラル、ト云フ

評云吾儕之ヲ某氏ニ聞ク某氏カ嘗テ県令ニ向ヒ君ノ本県ニ赴任以來書記官各課長等多クノ旧官吏ヲ転免サレシハ如何シ問ヒシニ君ハ則チ他ニ非ス本県人ハ勇敢剛毅忍耐ノ氣力ナクシテ事ニ堪サルニ由ルモノナリト答ヘラレシト然ラハ則チ今君カ東京ヨリ百五十名ノ巡査ヲ選抜シテ帰ラル、ハ本県人ハ巡査ニモ堪スヘトセラレシニ由ル歟嗟呼亦誠ニ本県人ハ三尺棒ヲ携フルニモ足ラサルカ何ソ其レ意氣地ナキノ甚シキヤ吾済(ママ)ハ県下ノ為メニ慷慨切齒痛嘆長息

評云千坂君モ亦真ニ英傑ノ士ニ非ル歟古諺ニ云ハスヤ良將ハ怯卒ヲシテ勇ナラシムト誠ニ君ハ英傑ニシテ其指揮命令ヲ失フ無ケレハ本県人モ亦人ナリ他ノ府県人ト□□□□堅鼻戴髮立行四肢百体ヲ具備シテ五官(ママ)ノ働キ□□□□朝夕君ノ教ヲ受テ職ヲ奉セハ何ソ属吏ニ堪サルカ如キアランヤ然ルニ君ハ之ヲ思ハス多クノ旧官吏ヲ免黜シテ更ニ新官吏ヲ登用シ其極達ニ巡査ニモ及フハ何ソ嗚呼君モ亦真ニ英傑ノ士ニ非サル歟呵

(明治一五年五月一六日付同誌第二号 六丁裏一七丁裏)

右「自由新誌」は、自由党系の新聞「北陸日報」の発行停止に備えた代替誌で、記事には県政への批判が多くみられるが、千坂が県庁の人事についてかなりの移動を行っていたとみられる記事がある点に注目したい。

(22) 前掲註(12) 参照。

(23) 後任の県令岩村高俊は、高知県県士族。戊辰の役で勲功を上げ、明治四年一月、宇都宮県権参事となり、以後内務官僚として累進した。一三年三月、内務大書記官に進み、明治一六年一月

一九日、石川県県令となった(前掲「百官履歴」二・百官七・一〇一四頁、「石川県史料」所収「官履履歴 巻之一」)。

(24) 前掲「石川県史 第四編」三二二頁。

(25) 例えば、前掲「稿本金沢市史 政治編第一」では、石川県官吏のうち、反千坂派とみられる「立憲真正党」なる党派に属する者は「小官下吏と雖も仮借せず官辺より追放」(同書二九三頁)されたところがあるが、その背景、あるいは補充人事に関する記述はみられない。

(26) 本史料中、太政官会議議案書の上には、本件を「当分格留」とする旨の付箋が貼られている。「格留」なる表記の意味が判然としないが、該付箋にある会計検査院への通牒日(明治一七年一月)を示す記述から、ここでは、本件支出の会計処理を遅らせたものと理解する。なお、大方の御教示を賜れば幸いである。

(27) 当時の会計年度は、七月より翌年六月までとなっていた(明治一五年一月太政官第五号達「会計法」第二条(明治一五年「法令全書」一八五頁)。本件史料にいう「一四年度分」とは、明治一五年五月、六月分を指すもので、総額三五二〇〇円の二二分の二にあたる、五八六七円支出を決めたものである。

附記 本件史料の読解にあたっては、金沢市史専門委員(近世部会)

長山直治氏より、懇切なる御教示をいただいた。特記して深甚の感謝の意を表したい。

前註

(1) 左に掲げる史料の出典は、国立公文書館蔵「自明治十五年至同十六年公文別録内務省一」である。

- (2) 史料の順番は、搭載順のままとし、個々の文書の終わりに破線を施した。
- (3) 各文書本文末に括弧書きで、史料の体裁を注記した。
- (4) 史料中、ゴチックの文字は、原本では朱書きであることを示す。
- (5) 各文書に見える個人印及び花押、機関名の印、太政官会議における出席参議欄の印はすべて省いた。また、上奏書に見える「可」の朱印は枠付ゴチックで、文書欄外に「秘」の朱印がある場合は、文書冒頭にゴチックで「秘」と附記した。

(二) 石川県県治改革ノ件

石川県下士族ノ情態朋党ヲ結ヒ陰險ヲ逞スル陋習有之候ハ一日ノ故ニアラス曩者当県令千坂高雅赴任以來主トシテ士族ノ方向ヲ正フシ其生計ノ途ニ就カシメント苦心計画緩急処分シ稍々其緒ニ就カントスルニ際シ先般鉄道企業ノ為メ旧藩主前田利嗣入県以來死灰再燃党派ノ軋轢一層甚敷加之小倉警部長暗打等ノ暴挙ニ及ヒ内外猜忌変詐百出如何トモ為スヘカラザル勢ニ有之畢竟藩政以來其陋習浸染ノ深キ今ニシテ断然一洗セサレハ後日ノ大害トナルヘキ情況相見ユルニ依リ県令千坂高雅ヨリ内申ノ次第有之右ハ該県陋習一洗ノ為メ先ツ第一ニ憲兵及ヒ東京巡查ヲ

派遣シテ金沢区内ノ警備ヲ嚴ニシ鉄道布置ノ許否ヲ決シ私学校ヲ廃シ且ツ属官警部等及郡吏ニ至ルマテ之ヲ精査シ其党派ニ關係アル者ヲ免黜シ之ニ代フルニ他邦人及党派ニ關係ナキ者ヲ採用シ就中小倉警部長ヲ暗撃セシ犯罪ヲ偵捕シ其罪ヲ糺明スル等痛ク陰險党派ノ風習ヲ一洗スルヲ要ス此場合ニ於テハ当県令ハ他ニ転任ノ上維新以來國家ニ勲勞アル旧藩出身者若クハ官省中名望アル者ヲ以テ後任トシ該一洗ノ御処分御委任相成ノ外有之間數趣ニ有之追々実況取調候処此際此主義ヲ以テ断然御処置無之テハ不相叶儀ト存候処尚實際着手ノ順序ヲ熟考候ニ前段ノ趣ニ依レハ其事稍々過重ニ涉ルヲ以テ少シク之ヲ斟酌シ県令ハ先ツ其俣被差置彼ノ小倉警部長ヲ暗撃シタル犯罪取調名義ヲ以テ東京警視庁警部巡查ヲ該地ニ派遣シ加之若干ノ官費巡查ヲ増置シ其警備ヲ嚴ニシ官吏ノ邪正ヲ正シ転免黜陟ヲ行ヒ前田家所願鉄道ノ許否ヲ決シ私学校設立ノ目的ヲ糺シテ教則ニ換ラシメ此改革畢ルニ及テ県令転任ノ遲ヒニ及ヒ度仍テハ予メ後任県令ト為ルベキ資格アル者ヲ以テ書記官ニ被命終ニ其組織ヲ一洗セシメハ漸次党派ノ陋習ヲ破解スルニ至ル可シ右ニ付テハ処分方法并ニ若干ノ費用ヲ要スヘクニ付別紙廉書ヲ添ヘ上申候条勢差迫候儀ニモ有之至急御裁決ヲ仰候也

明治十五年四月十二日

内務卿山田顕義

太政大臣三条実美殿

上申之通

明治十五年四月十七日

(版心「内務省」一三行罫紙)

別紙上申之旨趣ヲ以テ石川県治改革候ニ付テハ左之廉書通夫々御許容相成度此段前以相伺置候也

一現任警部長小倉信近義者至急転任セシメ後任者当分本省警保局員又ハ警視庁員ヨリ出張兼任之都合ニ取計度事

一小倉警部長暗打取調之名義ヲ以テ警視庁巡查五十名出張セシメ度事

但巡查之向者目下地方税連帶支弁之義ニ付派出員俸雜給等

一切之費用ハ別途官費下附相成度事

一庁下特別取締之為メ当分官費巡查百五十名増員右俸給雜給其

他一切之費用別途下附相成度事

但シ該巡查ハ可成他府県ヨリ採用セシメ候事

一県令書記官等臨時警備相附候義聴許致度事

一官費巡查百五十名分増費相成他府県ヨリ採用之上ハ改革之便宜ニモ可相成ニ付本県在来之警部巡查中ニテ警視庁及他府県へ転任セシメ候様之取計ニ可及事

一北陸鐵道布設之義ハ県治上影響不尠趣ニ付速ニ何分ノ御指令有之度事

一地方党派ニ因縁有之庁中ニ難指置官吏者改革之都合上官省他府県へ採用又ハ交換為致度兼テ各省長官へ御内示相成度事

一一時改革之際并ニ官省他府県へ官吏採用交換之都合上通常判任官定額ニテ相支兼候事情モ可有之ニ付先ツ一ヶ月三百円以内之予算ニテ無余義増員指繰等ニ付不足之向ハ実費支出相成度事

一一方ニ向テ嚴重ニ処分ヲ為スニ方テハ又一方ニハ寛宏ナル活路ヲ開カサルヘカラス付テハ今後県令ヨリ殖産之目的ヲ立上請スル節ハ必ス御許容被下度事

明治十五年四月十二日

内務卿山田顕義

太政大臣三条実美殿

(版心「内務省」一三行罫紙)

内務省上申石川県治改革之事

右謹テ裁可ヲ仰ク

明治十五年四月

可

(版心「太政官」八行野紙)

明治十五年四月十三日

左大臣熾仁親王

右大臣岩倉具美

参議 大木喬任

参議 山縣有朋

参議 井上馨

参議 山田顯義

参議 松方正義

参議 大山巖

参議 川村純義

参議 福岡孝弟

参議 佐々木高行

大臣

内務省上申石川県治改革之事

右回議ニ供ス

参議

別紙内務省上申石川県治改革之儀ハ具状之通御裁可相成可然哉
御指令案ヲ具シ仰 允裁候也

御指令案

上申之通

明治十五年四月十七日

(版心「太政官」一〇行野紙)

(二) 同県処分ニ付官吏交換ノ為メ要スル旅費支出方ノ件

【秘】

石川県下処分之儀追伸

内閣書記官

石川県下処分之儀ニ付相伺去ル四月十七日付ヲ以御指令相成候
 処右別申書第八項一時改革ノ際官吏採用交換等ノ都合上通常判
 任官月給額ニテ相支兼候ニ付一ヶ月三百円ノ目度ヲ以支出方ノ
 儀ハ本年度四月ヨリ十五年前半年度マテ増額開届実費支払ノ積
 該県へ指令及ヒ置候然ル所右官吏交換等ニ就テハ旅費ノ儀通常
 定額ニテハ引足リ兼候趣別紙之通該県令申出ノ趣有之事実無余
 義次第ニ付精々差操不得已分ハ実費支給相成候様致度右ハ大蔵
 卿協議ノ上予テ上申仕置候間此亦御許容相成度候也

明治十五年五月十五日

内務卿山田顯義

太政大臣三条実美殿

追テ御許容ノ上ハ大蔵省へ御達相成候様致度此段副申候也

追申ノ趣官吏交換ニ付要スル旅費ハ可成文ケ定額金ノ内ヲ以テ
 支并シ不足ニ及候節ハ金員取調更ニ申出ヘシ

明治十五年六月三日

(版心「内務省」一三行野紙)

特別ニ官員月給額及旅費等増額之儀ニ付伺

此程本県下官員月給増額之儀ニ付内務省ヨリ御内命モ有之候間

以特別一ヶ月三百円以内ノ予算ヲ以テ来十五年度限不足ノ官員
 月俸実費支給相成候様致度右ニ付テハ旅費之儀モ自然不足可致
 候得共右ハ尚取調相伺候様可致候条至急御開届相成度候也

明治十五年四月二十一日

石川県令千坂高雅

内務卿山田顯義殿

大蔵卿松方正義殿

(版心「内務省」一三行野紙)

【秘】

明治十五年五月十八日

大臣

内角書記官

内務省上申石川県下処分ノ件ニ付官吏交換ノ為メ要スル旅
 費之事

右回議ニ供ス

参議

(版心「太政官」一〇行野紙)

〔付箋〕

本件ハ当分格留ノコト追而會計検査院へ通牒ヲ要ス当第一局へ
モ協議スヘシ

六月六日 十七年十一月二十日會計検査院通牒

明治十五年五月十七日

第一局

別紙内務省追申石川県下処分ノ件ニ付官吏交換ノ為メ要スル旅
費ハ通常定額金ニテハ不足可致ニ付官費支給相成度旨ニ有之事
情不得已相聞候間左ノ通御指令相成判任官月給増額期限該県へ
指令ニ及候儀ハ御聞置相成可然哉仰高裁候也

御指令案

追申ノ趣官吏交換ニ付要スル旅費ハ可成丈ケ定額金ノ内ヲ
以テ支弁シ不足ニ及候節ハ金員取調更ニ申出ヘシ

明治十五年六月三日

(版心「太政官」一三行野紙)

(三) 同県特別警察費支出ノ件

石警甲第二三二号

特別警察費之義ニ付伺

特別警察費予算取調別紙之通石川県ヨリ伺出候右ハ県令出京之
上当時県下ノ情況陳述候趣ハ曾テ上申且処分方何定置候次第モ
有之ニ付該県申立ノ金額三万五千二百円別途御下渡相成候様至
急仰御詮議候也

明治十五年五月二日

内務卿山田顯義

左大臣熾仁親王殿

伺ノ趣聞届申出ノ金額十四十五兩年度ニ割合本年度ニ於テ金五
千八百六十七円下付スヘシ

但本文警察費ノ儀ハ別途ニ勘定仕上候義ト心得ヘシ

明治十五年五月十二日

(版心「内務省」一三行野紙)

特別警察費之儀ニ付伺

此度御内命モ有之候ニ付更ニ取調相伺候条至急御聞届相成候様

致度候

一特別増員之巡查二百名分且右ヲ統率スル警部費額別紙予算取
調書之通御下渡相成度候事

一警部巡查等一時多数来県致シ各自止宿ニ可差支且ツ士族邸及
市中ニ散在仕居候而者不取締モ不少旁便宜之地ニ於テ可然家
屋一時借上止宿為致度ニ付右止宿料等之儀ハ特別御下渡予算
ノ内ヨリ支出致度候事

右相伺候事

明治十五年四月二十一日 石川県令千坂高雅

内務卿山田顯義殿

(版心「内務省」一三行罫紙)

警察費特別増加金額予算

一金三万五千二百円

内

七千二百円 警部費

但月俸雜費共一人平均三十円ノ目安ニテ二十名分一

ケ年ノ積算

二万八千円 巡查費

但一人平均十一円六十六銭六厘六毛ノ目安二百名分
一ケ年ノ積算

(版心「内務省」一三行罫紙)

内務省伺特別警察費ノ儀ニ付上申

内務省上申特別警察費ノ義ハ石川県令出京ノ上具狀ノ次第モ有
之嘗テ内務省ヨリ処分伺定ノ旨モ有之趣ニ付別途御下附相成
候外有之間敷然ルニ右ハ本月ヨリ実施ノ趣ニ付請求年額金ヲ十
四十五両年度ニ月割区分ノ上御下渡相成可然就テハ本年度ニ属
スル五千八百六十七円ハ常用在金ノ内ヨリ支出可取計ト存候別
紙進呈此段及上申候也

明治十五年五月十日

大藏卿松方正義

左大臣熾仁親王殿

追テ本文特別警察費ノ義ハ通常警察費ト相異リ候モノニ付

別途勘定仕上致候様御指揮相成候方可然此段添申候也

(版心「大藏省」一三行罫紙)

〔秘〕

明治十五年五月十一日

大臣

内務省伺石川県特別警察費之事

右回議ニ供ス

参議

(版心「大蔵省」一〇行罫紙)

明治十五年五月十一日

第一局

別紙内務省伺石川県特別警察費ノ件ハ曾テ該省ヨリ処分方何定ノ次第モ有之由ニテ大蔵卿副申ニ於テモ異議無之ニ付申請ノ金額三万五千百円八十四十五両年度ニ割合本年度ニ於テ金五千八百六十七円御下付相成可然哉左按取調仰高裁候也

御指令按

伺ノ趣聞届申出ノ金額十四十五両年度ニ割合本年度ニ於テ

金五千八百六十七円下付スヘシ

但本文警察費ノ儀ハ別途ニ勘定仕上候義ト心得ヘシ

明治十五年五月十二日

大蔵省へ御達按

別紙内務省伺特別警察費ノ儀朱書ノ通及指令候条本年度ノ義ハ常用在金ノ内ヨリ繰合セ渡方可取計此旨相達候事

明治十五年五月十二日

会計検査院へ通牒

(版心「太政官」一三行罫紙)